

木塊との格闘

－ホモ・ファーベルとしての人間教育と地域産材でつくる生活用品－

Engaging with Woodblock

Human Education as Homo Fabel, in Making Livingware Use from Local Wood

富田 晃*・山内 将才**

Akira TOMITA*・Shosai YAMAUCHI**

要 旨

本稿は、筆者が、弘前大学でおこなっている木工関連の授業を紹介・考察するものである。哲学者のペリクソンは、人間を、自らの手でモノをつくることにより生活をより良くする「ホモ・ファーベル」（工作人）と定義した。分業化がすすんだ現代において、「ホモ・ファーベル」としての人間性を取り戻すために、木塊から、機械を使わず、手加工のみで何かをつくり出す授業をおこなっている。さらに、この授業を、地域の自然環境との共存を理念とする木工房でおこなうことにより、学生たちは、自然の一員としての生き方を学んでいる。

キーワード：地域の自然環境 ホモ・ファーベル 木と木材 手づくり

1. 「ホモ・ファーベル」（工作人）としての人間

チンパンジーは、石で木の実を叩き割って中の種を取り出して食べたり、アリ塚を木の棒でほじくって幼虫を食べたりする。人間が、人間になる以前から手にしていた道具は、木の棒や石だった。

二足歩行をはじめた人間の祖先は、自由になった手でモノをつくり、それを使うことによって人間になった。モノをつくるということは、言葉を使う、自分を意識する、他者を思う、死を恐れる、などととも、人間が人間であるための重要な要因である。フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（1859-1941）は人間を「ホモ・ファーベル」（工作人）と定義とした。

人間を「ホモ・ファーベル」（工作人）と定義するならば、人間が人間になったのは、石を投げつけて砕いた鋭利な石片を刃物として利用したときであった。そして、木の棒の一端に石を取り付けた石ヅチをつくり、石ヅチで殴り倒した動物を、石の刃物で解体し、その肉を火にかけて食べた。「ツチ」と「刃物」は、

人間の最初期から今日まで使われ続けており、人間にとって最も基本的な道具なのだ。そして、人間は、自らの手に、「ツチ」や「刃物」といった手道具を持ち、木、石、草、土などの身近な材料から、武器、カゴ、器、皿、カトラリー、家、家具など、さまざまなモノをつくるようになった。人間が、自らの生活をより良くしようと、自ら手に道具をもち自らの身体を動力源として、モノをつくる。これこそが、人間が人間である証である。

一方、現代社会は、分業によって成り立っている。義務教育を終えると、自らの専門や職業以外のことを経験する機会は一気に失われる。生活に必要なさまざまなものが低価格で手に入る現代において、モノをつくることは、プロがおこなう職業か、もしくは一部の人の趣味の領域に追いやられ、現代人の多くがモノをつくらない。つまり現代人の多くが「ホモ・ファーベル」としての人間性を失っているのである。

* 弘前大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University
** わにもっこ企業組合
Wanimokko Co.Ltd.

2. 木と人間のかかわり

富田が行う木工関連の授業では、第一回目に「一人につき一つ、木の特徴を話してください」と学生に尋ねている。学生は、「木は火に弱い」とか、「木は腐る」などと応える。そして、「木と鉄を比べるとどっちが火に弱いかなあ？ 9.11のときニューヨークのワールドトレードセンターが発災から間もなく崩落したのはどうして？」とか、「木は本当に腐りやすいの？ だって1300年前に建てた法隆寺はまだあるよ」などと問い直すと、学生たちは、考え込む。筆者は、「木は燃えやすいか／燃えにくいか」「木は腐りやすいか／腐りにくいか」「木は硬いか／やわらかいか」「木は限りある資源か／限りない資源か」などといった質問をして、学生たちが持つ木の知識やイメージを引き出しながら、さらに深い知識を伝えていく。人間とのかかわりという観点からみて筆者が学生たちに伝えたい木(木材)の特徴に、以下のものがある。

・木は、持続可能な再生資源である

金属はその埋蔵量を使いきれれば尽きてしまう。プラスチックの原料である石油は、動植物の遺骸が数億年の時間を経て生成されたものであり、人間の歴史スケールからみれば、金属と同じく、埋蔵量を使いきれれば尽きてしまう有限の資源である。一方、木材は、光と水をもとに光合成によってつくられる有機化合物である。太陽は約50億年前に形成されたときから今日まで光り続けている。また、約46億年前に地球が誕生したときから地球には水と空気があり、約38億年前に、生命が誕生した。つまり、木を形成するもととなる光と水と空気は、人間だけでなく生命体の歴史スケールからみても、ほぼ、限りない無限の資源といえる。ただし、生育量よりも多くの木を伐採すると、木は尽きる。比較的、成長の早いスギでも、木材として使用するには30年以上の時間がかかる。

日本では、戦後しばらくしてから1990年頃まで、国内で消費される木材の大半が東南アジアから輸入されたラワン材であった。日本の商社が東南アジアのジャングルに自生していたラワン木を大量に伐採して、日本に送った。その結果、東南アジアのラワンは枯渇し、ラワンが生えていた熱帯雨林は荒野となり、洪水などの災害が多発するようになった。つまり、回復できないほどのダメージを自然に与えないように心がけながら木を活用し、また、次世代のことを考えながら植林、手入れ、伐採をすれば、木は「限りない資源」

であるが、短期的な利益追求に走れば、木は、すぐさま「限りある資源」として枯渇する。それは、単に資源の問題にとどまらず、災害や生態系など、地球環境全体にかかわる問題である。

・木は、人間にやさしい

木材の熱伝導率は、コンクリートの約1/10、鉄の約1/500である。木材は熱伝導率が低いため、触っても、熱いとか冷たいとか感じることはなく、フライパンの持ち手などとして使われる。木材はパイプ状の形をした細胞が木化したものであり内側に多くの空気を含むために、熱が伝わりにくく、また、空気中の水分を吸収・放出する。そのため、木材に囲まれた部屋は、温度変化が抑えられるとともに、湿度が高くなると水分が吸収され、乾燥すると水分が放出されるので、人間にとって快適な環境になる。さらに、木材には、ダニや病原菌を防ぎ、フィトンチットによる癒し効果もある。

温帯や寒帯の木の断面には同心円状の模様の年輪があり、繊維方向にそって木材の中心近くを切り取った柾目面では、木目がほぼ平行線で表れ、周辺部に近いところで切り取った板目面では山形や波形などの年輪線が現れる。こうして現れる木目は、自然界がもつ規則性やゆらぎを可視化したものであり、壁材などの人口素材に木目プリントが使用されるように、人間の心をなごませる効果がある。

・気を使わなければ木は使えない

木は生物である。だから、木材の性格は、樹種による違いに加え、個体による違い、部位、育成環境、伐採の季節などによっても変化する。さらに、木には方向性による性格の違いがある。木でモノをつくる者は、こうした木の個性に十分に気を使う必要がある。

方向性による木材の性格の違いは、木の幹の表面近くにある形成層で増殖する細胞が上下方向に走る繊維状になっていることによる。

繊維方向に沿って長くとった部材は丈夫だが、繊維方向と直角に長くとった部材は折れやすい。だから、たとえ十分に強度に配慮した椅子を設計したとしても、実際につくる者が部材の繊維方向を間違えたり、部材のなかに節や割れなどの欠点があったりすると、まったく強度の足りない椅子ができてしまう。方向性による強度の違いは、部材のみならず、接着強度も異なり、柾目面や板目面には接着剤は有効であるが、パイプ状の細胞壁の断面である木口面には、ほとんど効

かない。

このように木を使ってモノをつくるには、一つ一つの部材の特徴や状態にまで十分に気を使わなければならないのである。

・人間とともに木はあり、人間とともに木は消える

奈良の正倉院の建物やその中の木工品を含む宝物が、1300年ほどの時を経ても現存しているように、木材は、人間が生活する温度や湿度では腐りにくいだが、人が住まなくなった木造の家屋がまもなく朽ちていくように、木材が人間の生活から離れて風雨にさらされたり地面に落ちたりすると、菌の分解によって木は土になる。現在、プラスチック製品の投棄による地球環境破壊が世界的な問題になっているが、自然の一部である木材は、エコロジカルに循環する環境システムのなかにある。

・変わらない木の加工技術

木は、鉄より硬度が低いため、鉄の刃物があれば、木をかなりなまでに精巧に加工することができる。日本では、6世紀に製鉄技術が確立し、7世紀はじめには、現存する世界最古の木造建築である法隆寺や、精緻な木工芸品の玉虫厨子がつくられた。つまり、木の加工技術は今から1000年以上前に頂点の域に達していたのである。法隆寺建造の頃の木工・大工道具は、オノ、ノミ、ヤリガンナであった。その後、室町時代になってから、台ガンナやノコギリが使われるようになり、以来500年ほどにわたって、手加工による木の加工技術に、さほどの進化はない。

例えば、コンピューターに関するスキルは、刻々と更新される新たな技術に対応しなければ、時代遅れの使えないものとなるが、木にかかわる手加工のスキルは、一度身に着ければ、生涯にわたり有用である。

・木は、使い次第で火に強い

木材はその状態によって燃えやすさが異なる。木材を原料とする紙が燃えやすいように、薄い木材は、燃えやすいが、材が厚く塊になると表面は炭化しても内部は燃えない。一方、9.11のとき、ニューヨークの高層ビルが発災から間もなく崩落したように、鉄骨構造は、高温にさらされると間もなく崩落する。

・木は狂う

木材は、空気中の水分を吸収・放出することにより膨張・収縮する。収縮率は繊維方向によって異な

り、例えばスギの場合収縮率は、含水率1%につき長さ方向で0.01%、柂目方向で0.1%、板目方向で0.2%である。生木の含水率は55%なので幅100cmであった板目の材が、気乾含水率15%になると92cmになるのであり、これでは、家具や建具の材料として全く使えない。そして、木材は方向性による収縮率の違いにより、ゆがんだり、割れたりする。板材などがゆがむことを「狂う」という。木材を加工するためには事前に十分に乾燥させたものを使う必要がある。

・日本の「引く」文化

西洋のノコギリは押して切るが、日本のノコギリは引いて切る。西洋の押して切るノコギリは、丈夫な刃物に体重をかけて押すことによって大きなパワーを生み出し力づくで切断するものであり、人間が、力で自然を征服するという西洋思想を具現化したものである。一方、日本の引いて切るノコギリは、やわらかい糸でも引けばまっすぐになるように、薄い刃物でも引くことによってまっすぐな加工を実現しようとするものであり、自然の摂理にしたがいそれを生かそうとする日本の思想を具現化したものである。

3. 青森の木材

森林資源に恵まれた日本では、古代から、木は様々なかたちで人間の生活に関わってきた。木には多くの種類があり、樹種により材質が異なる。日本では、縄文の時代から、石斧の柄にはヤブツバキなどの堅い木、狩猟に使う弓には固くてしなるカシの木、木の器には削りやすいトチノキ、住居の材料にはカシ、ヒノキ、クリ、シイというように、木は目的によって文字どおり適材適所に使われてきた。

青森県においては、針葉樹では、スギ、ヒノキ、ヒバ、カラマツ、アカマツ、カラマツなどが、広葉樹ではクリ、ナラ、ヤマザクラ、イタヤカエデ、ブナ、ウダイカンバ、セン、サワグルミ、オニグルミ、ホオ、シナ、ブナ、リンゴなどが産出される。

古代から青森には広大な自生林がある。高くまっすぐ成長し、抗菌性、耐久性の高いヒバは古代から青森の建材として利用されてきた。一方、ヒバの成長は100年以上の時間がかかるため、ヒバが伐採された後には、成長の早いスギが植えられた。青森のみならず日本全体で、戦後の木材需要で大量に切り倒された自生林は、スギの人工林にかわった。一方、高度経済成長のなかで、外国から安価な木材が輸入されるように

なり、国産材の需要が落ち込んだ。スギは、成長が早いとはいえ、木材として利用できるようになるためには30-40年ほどかかる。その間、下刈り、除伐、枝打ち、間伐などの手入れをしなければ有用な木材にはならない。林業は不振に落ち入り、働き手を失った山は放置された。また、手っ取り早い収入を得るために伐採した木材を売り払ったあとに、植林をせず、はげ山になると、山の保水能力が失われ、がけ崩れや洪水の原因となる。また、春先に飛散するスギの花粉は花粉症の原因となり多くの人々を苦しめている。

4. キット教材の問題点

小学校『学習指導要領』「図画工作科」には、中学年の「教材や用具」として「木切れ、板材、釘、小刀、使いやすいのこぎり、金づち」が、高学年で「糸のこぎり」が挙げられている。そして、学校の多くが、教材業者が提供するキット教材で授業をおこなっている。教材業者が提供する木を扱ったキット教材には、無垢材から削り出す、箸、ペーパーナイフ、スプーンや板材を組み立ててそれに彩色や彫刻をほどこすテッシュケース、状差し、オルゴールなどがある。キット教材の材料は、すでに、木取りを終え、寸法と材質が均一化されたものであり、どこで育った何という木であるか、や必要な部材をとるためにどういった端材が出ているのかを知るがとができない。木は、自然物であり樹種のみならず、個体、部位、方向などによって性質が異なるが、キット教材からでは、自然素材である木の特徴を、感じ取ることは難しい。

5. 木塊からつくる

本授業の課題は、一つの木の塊から、手作業で何かをつくる、である。大鱈町の木工房「わにもっこ」で出る端材を材料としている。端材には、定形がなく、さまざまな樹種、さまざまな形、さまざまな大きさのものがある。学生は、山積みの端材から、気に入った材を選び出して、その大きさ、形、樹種、木目などの個性を読み取りながら、何をどうつくろうかと考える。つくるものは何でも構わない。学生たちは自らの生活を潤そうと、箸、スプーン、調理べら、キーホルダー、小皿、まな板、といった実用品や、卓上の飾りなどをつくる。

材料は、一つの塊の材であり、複数の部材の接合はしない。そして、使う工具は、ノミ、玄能、ノコギ

リ、手引き糸ノコ、木工用鉄ヤスリ、サフォーム、紙や布のヤスリといった手工具であり、機械工具は使わせない。「刃物」であるノミを「ツチ」である玄能で叩いて彫る作業が、のこぎりで切る作業、サフォームやヤスリで削る作業である。一つの木の塊から、自らの手で、なにがどこまでできるか、というシンプルな課題である。

6. 木工房「わにもっこ」

山内が主宰する木工房「わにもっこ」は、自然環境との共存を目指し、①地元自然素材の魅力 ②木の生命力を大切にしたいシンプルなモノづくり ③木の周辺（虫、鳥や動物と樹木との関係）を知る、の三つの理念を掲げている。

青森県南津軽郡大鱈町は、日本三大美林の二つ、秋田スギの北限と青森ヒバの南限にあたり、西からは世界遺産白神山地ブナを中心とした広葉樹の延長線上の場所に位置する。「わにもっこ」がある大鱈町早瀬野地区は周囲を山に囲まれた里山の集落である。森林資源が豊富で、江戸時代から、春から秋にかけては農業を冬には山仕事をしてきた。雪降る頃、山子（きこり）たちが山に入り伐採した木材を馬で里に運んだ。しかし、昭和50年代に安い外国産材が輸入されると、国産材の価格が下落した。この地区の男たちは、山仕事をやめて、都会に出稼ぎに行くようになった。下刈り、除伐、枝打ち、間伐、植林と、山を守り、育てる人がいなくなり、山は荒れていった。こうしたなか、「自分たちの山や森をなんとかしなくては」「森の木を活かし付加価値をつけたい」という思いのもとに、昭和63年（1989年）に木工品の生産販売を目的とする「わにもっこ企業組合」が設立された。

「わにもっこ」の周辺の恵まれた森林環境は生き物たちの宝庫である。秋には、リスがオニグルミの実を頬張り残りを土の中に埋めるが、リスはその場所を忘れてしまう。また、サクラの仲間たちの実はツキノワグマやヒヨドリなどに食べられた後、消化されず排泄される。こうして、樹木は、生き物たちの生活行動に助けられて種子を拡散する。こうした動物たちと木々との共生の営みを観察することが、地域材の理解につながる。「わにもっこ」は、木に携わる人間として、単に木製品をつくるだけでなく、木の物語、つまり「木の周辺」を知ることによって山の豊かさを伝えていくことを大切にしている。

「わにもっこ」の主たる生業は、この地区で産出さ

れる木材を材料にした家具類の製作である。テーブルやイスなどを製作すると、端材がでる。私たちは、そうした地域産材の端材を活かして、皿や玩具といった小物をつくり、さらに残った材を、冬場のストーブの焚きつけ材としている。このように、一旦切り倒した木のすべてを使い切るようにしている。

「わにもっこ」では、南津軽で産出される以下の樹種を用いている。

広葉樹：オオヤマザクラ、オニグルミ、イタヤカエデ、トチノキ、センノキ、カツラ、ケヤキ、クリ、ブナ、ナラ、シウリザクラ、ニレ、リンゴ、ホオノキ、ニセアカシア、エンジュ、カンバ類

針葉樹：ヒバ、スギ、マツ類など

「わにもっこ」では、上記の理念のもとに、木工品の製造ばかりでなく、広く社会にむけた教育活動も展開している。まず、初心者向けの木工教室を、地域の小学校、国際芸術センター青森、大鰐小学校、JRの体験型観光企画などでおこなっている。また、より本格的な木工教室も月2回の終日で開講している。さらに、周囲の豊かな自然環境を生かして、自然観察会や料理教室などもおこなっている。

7. 授業の概要

2002年に弘前大学教育学部に着任した冨田は、自然との共存を大切にしながらも、全国に向けた発信や社会教育活動を展開している「わにもっこ」の在り方に感銘した。2003年から、学生を「わにもっこ」に連れて行き、木工によるモノづくりをしたり、里山を散策したりする活動をはじめ、2006年からは教育学部生涯教育課程芸術文化専攻の授業「芸術文化実地演習」とした。その後の課程廃止にともない、同様の授業を2016年度からは全学教養教育の「地域プロジェクト演習」において開講している。単に、モノをつくることだけが目的であるならば、わざわざ「わにもっこ」に出向いて授業をせずとも大学の実習室でもできる。ただし、自ら育て、守っている山から得られる木材をつかって、モノづくりをしている人たちが、暮らし、そして仕事をしている場所に、学生を連れていくことの意義は大きい。また、カリキュラムの都合上、「わにもっこ」まで学生を連れていくことはかなわないものの、「わにもっこ」で出た地域産材の端材を材料とし

たモノづくりの授業を、教育学部学校教員養成課程における「小学校図画工作演習」でおこなっている。

8. 学生の感想

- ・機械を使わずに、全てを手で行う大変さを痛感した。のこぎりでまっすぐ切ったり、糸のこで曲線をひいたりするのは難しいし、とても疲れる。でも、だからこそ、うまく切れたときはうれしかった。そして、やすりがけをして、スベスベになり、木目のはっきりしてきたときは、本当にうれしかった。途中まで自分の作品があまり好きではなく、周りの人たちの作業の早さに、心折れそうになっていたが、頑張っって自分の納得いく作品ができて今ではすごく愛着がある。

- ・木を彫る難しさがわかった。自分の手で切り、彫っていく工程は、想像以上に難しく、思ったようにはいかなかった。でも、自分で思いどおりにいかなかったところが、逆に作品の味になり、初めにつくろうとしたものよりも、自分で納得できるもののできたことに感動した。手作業ですることによって細かな部分にまで自分の思いを入れることができた。また、まっすぐ切ろうとしたのに、曲がって切れてしまったことで、むしろ、個性が出てきたことが面白かった。普段、木材にかかわることはあまりなく、木の触感や匂いを感じながら作業をしてゆくなかで、木の良さをあらためて実感することができた。

- ・子どもたちの創造心や探究心は、既製品だけでは活きてこない。木材を一から手作業で加工して何かをつくる活動を学校教育に、ぜひ取り入れたい。今回の授業を通じて、単に、ものづくりというだけではなく、里山での暮らしや、木の周辺に関する生き物たちの営みについて学んだ。小学校の学びにおいても、このような体験を与えたいと思った。

- ・自分の手で一からつくると自然と愛着がわいて大切にしようという気持ちになり、良いものを長く大切に使うことに繋がる。使い捨てのプラスチックのものが多い今の時代、木のあたたかな質感を、生活にとりいれるいい教材だと思った。機械を使わないで、手作業にすることで危険を減らすことができるとともに、作品に味わいもでる。また、「わにもっ

こ」に実際にいって授業をおこなったので、木がどのように育ち、そして木からものができるかということ、そこにいきる人々の暮らしのなかで理解することができた。

- ・さまざまな樹種や形の端材から、自分で材料を選び出し、木取り、加工の一連の流れを、手作業でおこなった。つくりながら、研磨しすぎて曲がってしまったり、先が折れてしまったりして、最初に予定していたものと別なものができたが、結果、ちょうどいい感じの味のあるものが出来た。私は、糸のこぎりなどは電動のものに慣れているが、あえて手加工にこだわることによってはじめて分かる、ものづくりの大変さや面白さに気づくことができた。

- ・木を選ぶということからはじまり、全てを手作業で一つの作品を完成させたことに大きな意味があると感じる。木と木の周辺を知り、お気に入りの木を選び、作り方の計画をたてて、試行錯誤しながら作りあげていくうちに、作品への愛着がどんどん増していった。はじめ糸ノコでだいたいの形を切ったときは直線も曲線もガタガタだったが、サフォーマやヤスリの作業をすすめていくうちにだんだんと自分の理想の形になっていった。また、大鰐町までいって授業をすることで、自然の中を散策したり、そこに暮らし、そこで、ものづくりをしている方の話を聞くことができたりして、製作以外にも多くのことを学ぶことができた。

私は小学校の授業で電動の糸ノコを使ったが、とても怖く、早くやめたくて妥協したものを作った苦い思い出がある。手引きの糸ノコならば、材料をクランプで押さえて、両手でノコをもって作業をすればケガをすることはないし、もし、なにかあっても、自らすぐに刃をとめることができる。学校教育では、作業の効率をもとめて機械を使うのではなく、手作業でつくらせるべきだ。そして、手作業であればこそ作品に強い愛着をもつことができると思った。

- ・この授業では、まず木とは何かについて改めて考え、その木を材料としてもものをつくることの意味を考え、その上で、実際に手作業でつくりたいものをつくった。

木の種類は多く、人間はそれらを使い分けながら、家や家具やいろいろなものをつくってきた。木

材は、そもそも生物なので、人間にとっても快適な温度や湿度をつくらうとする。木を加工するとき、木の性質や繊維の方向に注意しなければならない。そうした注意をはらうことが、木でモノをつくる面白さなのだとおもう。また、手作業で時間をかけてつくるものは、多少出来栄が悪くとも、愛着がわく。

- ・私はイタヤカエデでしゃもじをつくった。作っていつくづく感じたのは樹種による特徴の違いである。イタヤカエデは、硬くて強度の心配はないが、手作業での作業はハードで覚悟したほうがいいといわれた。でも、私は、木の肌の色合いが気に入り、イタヤカエデでつくった。他の材料の人が、どんどん作業が進むなかで、一人、はかどらず、樹種によってこんなにも性質がちがうのだと実感した。体力は消耗し、最初のイメージよりゴツゴツしたものが出来上がったが、丈夫で味のあるものになった。「わにもっこ」の迎賓館は、丸太づくりで、なかには分厚い無垢のテーブルがあり、木のあたたかみにつまれて、懐かしく、心落ちついた。そのような場所で暮らしていくのもいいなと思った。

- ・この授業を受けて、木でもものをつくる楽しさを知るとともに、それを自らの職業にしている人がいることを知った。木の肌触りや匂いを感じながら、自分の手でつくりたいものをつくる過程が楽しかった。また、ただ、黙々とつくるだけでなく、外を散歩して、適度に休憩しながら、考えながらものをつくることの良さも知った。また、お昼に食べた豚汁とおにぎりがおいしかった。ただ、ものづくりだけではなく、暮らしと仕事がつながっている素敵さを感じた。

- ・生まれてはじめて、機械を一切使わずに、木でもものをつくった。自分の手で最後までつくりあげたものには愛着がわく。わにもっこでいろんな木の製品をみた。どれも温かみがあり、可愛かった。木目がみんな違うので、個性的で、まるで子どもたちのように感じた。山村の情景の美しさとそこでの暮らしを、大切に守らなければならないと思った。

- ・一つの塊の木から何かをつくる体験は、はじめてで、最初は不安だったが、何とか形になってよかった。今回は全てが手作業だったので、機械できれいな

に作りあげるのとは異なった、少しゆがんだ温かみのある作品ができた。今回は、鍋敷きをつくったので、また機会をつくって、箸や箸置きなど作って、食卓のものを自分でつくった木のものにしていきたい。また、お昼もおいしく、散歩も楽しかった。散歩では、獣道みたいなどころを歩いて童心にかえて楽しんだ。カメムシとの闘いもよい思い出で、前より、自分がたくましくなれた気がする。

- ・箸置きをつくった。秋らしい自然っぽいものにしたくて葉っぱの形にした。小さいものなので、形を切り出してからも時間があり、丁寧にヤスリをかけたら、手触りのいい作品ができた。作品に、とても満足するとともに、木から人の手だけでもものつくる楽しさを実感した。わにもっこでは、おいしいお昼を食べて、自然の中を歩きまわって、先生たちとたくさんお話ができて、とても貴重な時間を過ごすことができた。そして、今まで知らなかった木の種類や特徴や、たくさんの道具について学ぶことができた。
- ・木を加工して何かをつくるのは中学校の時以来だった。自分で何かをつくるということをしばらくしてないことに気が付いた。わにもっこの周辺は、実家に似ていて散歩は帰省したみたいで、小さいときどんな遊びをしていたか思い出しながら歩いた。わにもっこにある商品たちは、どれも温かみがあって好きだった。将来家を建てるときは、木の家がいいとおもった。
- ・ペンギンの形の箸置きをつくった。機械化が進んで

いるこの世の中で、自分の手で何かをつくるという貴重な経験ができた。いくつかの道具を使い、自分がつくりたいのもができて、とても嬉しかった。次は、実家にある道具で、皿など、彫る作業に挑戦しようと思う。わにもっこでは、大自然の中でのびのびと作業ができた。また、お散歩をすることで里山での暮らしを感じることができた。近所の人たちも面白くて、こういった中でこそ、素敵な作品が生まれるのだとわかった。

8. おわりに

学生たちは、一つの木の塊から、手作業で何かをつくることを通じて、自らの手でモノをつくり生活をよりよくする「ホモ・ファーベル」としての人間の在り方を学んだ。また、自ら木を育てている山の木材をつかってモノづくりをしている地域の工房で授業をすることにより、学生たちは、地域の環境を理解し、自然の一員としての生き方を学ぶことができた。こうした人間教育の取り組みが、未来を生きる者たちの深いところに意味をもつことを期待する。

山内将才, 両角健一「大鰐の魅力を伝えたい：地元に根ざし、県外市場で活躍」『月刊れぞおん青森』461, 2017
「わにもっこ」のウェブサイト

<http://www.wanimokko.jp/>

JR 東日本のウェブサイトより「TRAIN SUITE 四季島を支える想い：木工工房わにもっこ代表・山内将才」

<https://www.jreast.co.jp/shiki-shima/story038.html>

(2020.12.18 受理)



青森県南津軽郡大鰐町早瀬野地区



「わにもっこ」 左が休憩所 右が作業場



作業風景



近くの山を散策 樹木の名前や特徴を学ぶ



出来上がった作品①



出来上がった作品②



記念写真①



記念写真②